



大阪商業大学

第 27 号

2026 年 3 月発行

FD ニュースレター

CONTENTS

1	公開授業と意見交換会	1
1.1	公開授業	1
1.1.1	実施目的	1
1.1.2	対象科目と実施期間	1
1.2	意見交換会	2
1.3	公開授業を終えて	3
	「物流管理論」 田中 康仁（総合経営学部商学科 教授）	3
	「地域経済学Ⅱ」 石田 信博（経済学部経済学科 特任教授）	7
	「英文会計」 矢部 孝太郎（総合経営学部経営学科 教授）	10
	「経営情報論Ⅱ」 安高 真一郎（総合経営学部経営学科 准教授）	15
	「交通経済論」 湯川 創太郎（経済学部経済学科 准教授）	18
	「スポーツ事業論」 古屋 孝生（公共学部公共学科 専任講師）	22
	「経営学概論Ⅱ」 辺見 佳奈子（総合経営学部経営学科 准教授）	24
	「マーケティング戦略論Ⅱ」 下坂 光（総合経営学部商学科 助教）	26
2	授業アンケート	29
2.1	実施方法	29
2.2	対象科目	29
2.3	質問項目	29
2.4	教員からのフィードバック	30
2.5	集計結果の開示方法	31
3	FD ワークショップ	31
	「第 1 回 FD Workshop 2025 の開催」	
	宍戸 邦章（公共学部公共学科 教授・FD 委員会委員長）	31
4	大学院 FD 活動	33
	「『2025 年度修士論文中間報告会』開催される」	
	宍戸 邦章（大学院地域政策学研究所 教授）	33

1 公開授業と意見交換会

1.1 公開授業

1.1.1 実施目的

公開授業を行う目的は、他の教員による授業を参観することで、各教員が授業運営方法や工夫について新たな知見を得るほか、公開授業の担当教員と意見交換する機会をもち、その結果を互いの授業運営に活かしていくことにある。このため、各授業では、参観教員が興味深いと感じた点や参考になると思った点などを自由記述形式で回答するアンケートが実施された。また、公開授業の担当教員と参観教員が対面式で意見を交わす意見交換会が後日開催された。

1.1.2 対象科目と実施期間

今年度の公開授業は、後期授業期間の第11週にあたる2025年11月17日（月）～20日（木）に行われた。今回対象となった8つの授業科目名と担当教員名、開講日時、教室は下表のとおりである。これらの対象科目は、今年度着任した新任教員の担当科目を含む後期開講科目から、授業内容や受講者数などを勘案し選出された。

<公開授業の対象科目>

月日	時限	科目名	担当教員	教室
11月17日（月）	1	物流管理論	田中 康仁 （総合経営学部商学科 教授）	422
	4	地域経済学Ⅱ	石田 信博 （経済学部経済学科 特任教授）	426
11月18日（火）	2	英文会計	矢部 孝太郎 （総合経営学部経営学科 教授）	961
	4	経営情報論Ⅱ	安高 真一郎 （総合経営学部経営学科 准教授）	961
	5	交通経済論	湯川 創太郎 （経済学部経済学科 准教授）	412
11月20日（木）	1	スポーツ事業論	古屋 孝生 （公共学部公共学科 専任講師）	424
	2	経営学概論Ⅱ	辺見 佳奈子 （総合経営学部経営学科 准教授）	432
	4	マーケティング戦略論Ⅱ	下坂 光 （総合経営学部商学科 助教）	521

公開授業の実施については、11月5日（水）開催の教授会において、FD委員会委員長の宍戸邦章教授よりアナウンスが行なわれ、各教員に参観が呼びかけられた。

1.2 意見交換会

公開授業に関する意見交換会は、本学におけるFD研修として実施されている。今年度は、2025年12月3日（水）16:30～17:30に本館6階研修室において、教職員18名が参加して行われた。会次第は以下のとおりである。

<会次第>

1. 開会挨拶（FD委員会委員長 宍戸邦章教授）
2. 公開授業の担当教員と参観教員による意見の交換
3. 総括と閉会挨拶（FD委員会委員長 宍戸邦章教授）

公開授業検討ワーキングの森田学教授による司会進行のもと、まず公開授業の科目ごとに参観教員の代表1名が感想や意見、あるいは質問を述べ、次にその授業の担当教員が授業運営上の工夫や苦心している点を報告し、参観教員のコメントや質問に答える、という形式で会は行われた。

会では参加者間で有意義かつ建設的な意見交換が行われた。下の写真はその様子である。

<意見交換会の様子>



1.3 公開授業を終えて

公開授業を担当した8名の教員には、意見交換会で報告した授業運営上の工夫や苦心、公開授業を終えた感想、アンケートや意見交換会で出た意見や質問に対する回答などを文章の形でまとめていただいている。ここでは、公開授業の開講日時順に、各教員の文章と公開授業時の写真を掲載している。



「物流管理論」

田中 康仁

(総合経営学部商学科 教授)

1 はじめに

2025年4月より、大阪商業大学総合経営学部に着任いたしました。講義系科目として、前期は「物流産業論」「商学概論Ⅰ」「商学特殊講義Ⅱ」、後期は「物流管理論」「商学概論Ⅱ」「流通チャネル論」を担当しています。あわせて、演習系科目である「ゼミナールⅡ・Ⅲ」では、ゼミ生とともに物流を主題として学修を進めています。

「物流管理論」は月曜日1限に開講しており、履修登録者は総合経営学部の学生80名です。授業では、パワーポイントで作成したスライドをスクリーンに投影し、それをもとに解説を行っています。さらに、授業内容と関連する動画資料を積極的に取り入れることで、学生が具体的なイメージを持てるよう工夫しています。

毎回の授業後には、manabaを用いた小レポートを課し、学生の理解度を把握しています。加えて、翌週の講義では優れたレポートを取り上げ、内容の共有とフィードバックを行っています。

2 講義のねらい

まだ記憶に新しいところですが、2年前のこの時期(2024年1~3月頃)には、「物流の2024年問題」が多くメディアで報じられました。2024年4月から、トラックドライバーの時間外労働に上限(年960時間)が設けられたことで、従来と同様の物流サービスが維持できなくなるのではないかと懸念が広がりました。これは、物流の重要性が社会的に強く意識された象徴的な出来事であったと感じています。

こうした話題を講義の冒頭で取り上げると、学生は比較的高い関心を示してくれます。初回講義であることも影響しているとは思いますが、物流を身近な社会問題として捉えるきっかけになっているようです。ただし、その関心が物流業界への就職志望につながっているかという点については、必ずしも楽観できません。厚生労働省の一般職業紹介状況(2025年11月時点)によれば、全産業の有効求人倍率が1.18倍であるのに対し、運輸業である自動車運転従事者業では2.66倍と高水準にあり、人材不足が依然として続いていることがわかります。

本学の主な就職先を見ると、運輸業・旅客業への就職は全体の3.1%にとどまり、卸売業・小売業(29.8%)と比べて大きな差があります。また、文部科学省の学校基本調査においても、社会科学系学部の2025年3月卒業生の就職先は、運輸業・郵便業が3.4%、卸売業・小売業が16.7%となっています。単純な比較はできないものの、本学が卸売業・小売業への就職に強みを持つ商業大学であることが、こうした数値にも表れているといえるでしょう。

私自身、物流・ロジスティクスを専門としており、物流業界の実務家の方々と意見交換を行う機会も多くあります。その中で、「物流に関心のある学生を紹介してほしい」「企業や業界の説明の場を設けたい」といった声を聞くことが少なくありません。企業が求める物流の総合職とは、現場業務にとどまらず、企画や管理までを含めて物流全体を担う中核的な職種です。しかし現実には、「きつい」「長時間労働」といった現場中心のイメージが根強く、学生の進路選択に影響を与えている側面もあります。

こうしたイメージを和らげ、物流をマネジメントの視点から捉えられる人材を育成することを、本講義の大きな目的としています。その一環として、必要に応じて実務家の方を招き、学生に直接お話しいただく機会も設けています。

－実務家の方を招いての講義－

学生に、物流企業で総合職として働く具体的なイメージを持ってもらうことを目的として、実務家の方（トランコム株式会社）にご登壇いただく機会も設けました。

アンケートの自由記述欄には、「物流の重要性を改めて実感した」、「物流業界で働くことイメージにつながった」、「物流業界に興味をもてた」、といった声が寄せられました。また、『これまで物流業界や物流会社について調べたり、訪問したことはありますか？』という質問に対しては、“ない”との回答が9割を超えていました。一方で、講義終了後に行った『今後、インターンシップ・会社説明会に参加したいと思いますか？』の問いには、“検討したい”と答えた学生が52%と半数を上回っており、本講義を通じて物流企業への関心が一定程度高まったことがうかがえます。

この場を借りて、ご協力いただいたトランコム株式会社のご担当者様に、厚く御礼申し上げます。

<講義の様子>



3 講義内容と工夫している点

3.1 公開授業当日の講義内容

公開授業となった第9回では、「在庫管理（在庫計画）」をテーマとしました。在庫管理は物流分野の中でも歴史が長く、理論体系が確立されている領域であり、多くの大学で扱われています。理

論上は数式を用いて発注時期や発注量を決定しますが、実務の現場では在庫管理システムによる運用が中心で、担当者が数式を直接用いる場面は多くありません。それでもなお、意思決定の背景にある考え方を理解することは重要であると考え、本講義ではこのテーマを扱っています。

需要が日々変動する中で、商品を切らさず、かつ持ちすぎない状態を維持するためには、在庫管理の考え方が欠かせません。実社会では、天候や季節などの影響により販売量が変動するため、在庫をゼロにすることは現実的ではありません。したがって、過剰在庫によるコスト増と、欠品による機会損失との間で適切なバランスを取ることが求められます。

在庫管理の方法は、「発注のタイミング」と「発注量」という2つの軸から整理することができます。具体的には、①定期・定量、②不定期・定量、③定期・不定量、④不定期・不定量の4つに分類されます。需要が比較的安定している場合には①が適していますが、需要変動が大きい場合には④のような柔軟な対応が必要となります。

計算方法の基本的な考え方は、発注費用と在庫保管費用の合計を最小化する点にあります。経済発注量 (EOQ) は、この2つの費用が最も効率的に均衡する発注量を求める手法です。また、欠品を防ぐためには、リードタイム中の需要に加え、安全在庫を考慮した発注点の設定が重要となります。

講義では、これら4つの方法それぞれについて演習問題を用意し、学生自身が計算に取り組むことで、理論の理解を深められるようにしました。

3.2 授業運営において工夫している点

本講義では、物流業界への関心を喚起することを第一の目的としつつ、「わかりやすさ」と「学生が主体的に考えること」の2点を特に重視しています。

「わかりやすさ」を高めるため、可能な限り具体的な事例を用いて説明するよう心がけています。物流は産学連携が進んでいる分野であるため、私自身が現場見学やヒアリングを通じて得た経験や知見を、授業の中で積極的に紹介しています。公開講義を参観された宍戸先生からは、「在庫管理を学ぶ上で、興味が持ちやすい事例紹介があった」「計算問題が具体的で興味が魅きつける工夫がされていた」「計算練習が分かりやすかった」といった評価をいただき、大きな励みとなりました。

一方で、講義では私がほぼ一方的に話をしているため、学生が発言する機会は限られています。そのため、「学生が自ら考える」機会として、小レポートを重要な位置づけとしています。翌週の講義では学生のレポートを紹介しながら振り返りを行っていますが、その際、選定するレポートは、内容だけでなく、学生自身の意見が書かれているかを重視しています。この点については講義内でも伝えています。AIの活用を一概に否定するものではありませんが、自分の言葉で説明する姿勢を身につけてほしいと考えています。宍戸先生からは、「授業の導入段階で、前回のコメントへのフィードバックにより振り返りの時間が設けられているのが良かった」とのコメントも頂戴しました。



4 意見交換会及び公開授業アンケートにおけるコメントに対する回答

<コメント1>

授業資料の公開はどこまでですか。

<回答>

授業資料については、PowerPoint を PDF 化したものを manaba に掲載しています。すべてを完成させた資料を配布するのではなく、学生に特に理解してほしい重要事項やキーワードについては空欄を設け、講義中に記入してもらう形式をとっています。また、今回の公開授業で扱った演習問題についても、計算結果をあらかじめ示すことはせず、学生自身が手を動かして導き出すようにしています。

<コメント2>

課題点がありますか。

<回答>

課題として、講義内容の理解度を確認する manaba による小レポートを毎回提出させています。成績評価基準（シラバス）は、小レポート 50%、期末試験 50%なので、小レポートによる課題点の影響は大きいと考えています。AI の利用が無いとは言いきれませんが、自分の理解をしっかりと言語化している学生も多いです。そうした学生のレポートを翌週の講義で紹介するようにしています。

<コメント3>

出席させるのにどのような工夫をしていますか（特に1限目なので）。

<回答>

正直、特段の工夫は行っておりません。講義の折り返しである第8回の時に、出席者をカウントした結果、80人の履修に対して、出席者は46名でした。今後も「分かりやすい」と感じてもらえる講義を継続することが、結果として出席率の向上につながると考え、講義内容の改善と更新に努めていきたいと思えます。

<コメント4>

授業で困っていることはありますか。

<回答>

特に大きな困りごとはない、というのが率直な印象です。月曜日の1限という時間帯の影響もあると思われませんが、教室内は比較的落ち着いており、集中して話を聞きたい学生にとっては、学修しやすい環境であると感じています。もちろん、居眠りをしている学生やスマートフォンを操作している学生が見受けられることもありますが、その点については学生の自主性に委ねたいと考えています。一方で、今後の課題として、授業への関与を高める工夫を検討していく必要性も感じています。

5 おわりに

月曜日の1限という時間帯にもかかわらず、多くの先生方や担当職員の方にご参観いただき、誠にありがとうございました。今回の公開授業は、自身の講義運営を客観的に振り返る貴重な機会となりました。

特に、FD 委員会委員長の宋戸先生には、授業参観に加えて丁寧な資料をご準備いただき、意見交換会においても多くの示唆に富んだご意見を頂戴しました。これまで自身では意識していなかった点を評価していただけたことは、大きな励みとなっています。また、寄せられたご質問やコメントに向き合うことで、今後、学生にとってより良い講義環境を整えていけるのではないかと感じています。

改めて、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



「地域経済学Ⅱ」

石田 信博

(経済学部経済学科 特任教授)

1 はじめに

2025年4月より経済学部の特任教授として着任しました。担当授業は、「地域経済学Ⅰ・Ⅱ」「マクロ経済学入門」「ミクロ経済学入門」「地域連携史Ⅱ」「地域探究実践Ⅱ」「ゼミナールⅡ・Ⅲ」です。前年度には、非常勤講師として、「地域連携史Ⅱ」「地域探究実践Ⅱ」を担当していましたが、公開授業の対象となった「地域経済学」は、初めて担当します。

大学での授業経験は長い方ですが、満足できる、納得できる授業をしたことは今まで一度もありません。受講生の反応を窺いながら試行錯誤で授業を進めることが多く、後悔と反省を繰り返してきました。今年は着任一年目ですので、なお一層手探りで授業を進めている状態です。

そのような中で、公開授業を経験させていただき、授業の後と意見交換会においては貴重なご意見を頂戴しました。とても参考になりました。感謝申し上げます。頂いたご意見は今後の授業に必ず役立てたいと考えています。

2 授業の概要

2.1 「地域経済学Ⅱ」について

担当している「地域経済学」は、前期開講の「地域経済学Ⅰ」と後期開講の「地域経済学Ⅱ」に分かれています。「地域経済学Ⅰ」では、地域経済学で用いられる基本的な概念と分析ツール、ならびに地域経済学がカバーする対象について具体例を挙げながら講義しています。

「地域経済学Ⅱ」では主に地域経済に関する政策について講義しています。代表的な地域政策・都市政策・まちづくりを取り上げ、地域を活性化させるための具体的な方策を解説しています。授業で取り上げた主な事例は次のとおりです。

- ・産業（伝統産業）振興と地域経済社会
- ・文化振興（文化遺産、文化施設）と地域経済社会
- ・観光振興（コンテンツツーリズム、アニメツーリズム、フードツーリズム）と地域経済社会
- ・祭りと地域経済社会
- ・住民（関係人口）と地域経済社会

これらの事例について、それぞれ代表的な地域（都市）に焦点を当てながら講義しました。取

り上げている事例はすべて地域資源と呼ばれるものであり、それらの地域資源を充実させることが地域力を向上させ、地域社会・地域経済の活性化・発展に結び付いていくプロセスについて解説しています。



2.2 授業の進め方

授業の初めには、授業内容のキーワードを説明することにしてしています。その後、前回までの復習をしたうえで、今回の授業の講義全体における位置づけを説明します。授業の終わりには、キーワードをもう一度説明し、復習しながら理解を深めるようにしています。

授業内容については、盛り沢山にしないことにして、少しずつゆっくりと解説することを心掛けています。そのために、意識的に説明の繰り返しを多くして、できる限り分かりやすい言葉で話すようにしています。また、具体的事例を取り上げながら、現実問題の理解が深まるように説明しています。

授業内容の理解を進めることを目的に、小テストを複数回実施しました。成績評価においては、小テストの成績のウェイトを大きくしています。

2.3 公開授業の内容

公開授業では、祭りを取り上げて、祭りが地域資源として機能していることを中心に解説しました。そして、祭りが地域活性化に結び付くプロセスを説明しながら、祭りを核とする地域力向上・地域活性化方策を考察しました。授業内容の項目は次のとおりです。

- ・地域力・地域資源・まちづくり
- ・社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）
- ・祭りと地域力
- ・祭りの進化（神事と祭礼）
- ・祭りと地域経済・地域社会
- ・祭礼文化資本
- ・祭礼組織
- ・祭りと地域社会の社会経済的アプローチ
- ・（事例）岸和田だんじり祭（何故だんじり祭か？）
- ・岸和田だんじり祭の祭礼運営（祭礼組織）
- ・岸和田だんじり祭の変容（いなか祭りから都市祭礼へ）
- ・地域資源としてのだんじり祭（観光資源、文化資源、産業資源）
- ・祭礼組織と住民の結び付き（ソーシャル・キャピタル）
- ・だんじり祭と地域力

3 意見交換会で頂いたご意見とコメント

意見交換会では、私の授業について貴重なご意見を頂きました。非常に参考になるご意見ばかりです。

<コメント1>

授業はPPTスライドを映しながら進めていたが、スライドに載っていない口頭説明による情報をノートに取る学生はほぼいなかった。メモを取ることは、「教える・教わる」という作業の再現性を高めるための工夫であり、社会人になったときの必要な能力である。授業は話しが中心であったが、学生にどこをどのようにメモさせているのか。

<回答>

事前に manaba course にアップする授業資料（PPT 資料）をダウンロードして、その資料にメモを書き込むように指示していますが、実行している受講生は非常に少ないようです。話しを聴きながらメモすることは難しいようですので、メモすべきことを板書した方が良く考えます。板書も使うようにはしているのですが、機会が少ないようですので、板書の頻度を増やしたいと思います。

<コメント2>

授業の前半で取り上げた基本概念・用語と後半の事例との結び付きについて、受講生は理解できていないように見受けられた。前半のスライドと後半のスライドを並列して、それぞれ対応させるなどの工夫をすれば理解しやすいのではないか。

<回答>

ご指摘の通りと思います。スライドは一つずつ順番に映していただくだけではなく、それぞれの説明部分（スライド）と他の部分（スライド）との関係が明示できるような工夫を考えたいと思います。

<コメント3>

専門用語が多く出てくるが、受講生が用語の意味をどの程度理解しているのか気になった。所属学部によって既知である用語とそうでない用語が異なるので、その点への対応はどうしているのか。

<回答>

基本用語を理解することが最も重要と考えます。所属学部の違いに関係なく、基本用語は繰り返し説明することを心がけたいと思います。

<コメント4>

話すスピードが適切で聞き取りやすい。コツがあれば教えてほしい。

<回答>

授業内容を盛り沢山にはしないで、少しずつゆっくりと解説することを心掛けていることが、私の話すスピードになっているのかと思います。但し、スピードが一様であれば単調になってしまいますので、説明内容に応じてスピードや強弱に変化を付けたいと思います。

以上、頂いたご意見は全て核心的で、私の授業の欠点を鋭くご指摘くださいました。授業を改善する上で重要なポイントばかりです。ご意見を取り入れながら、次年度からの授業をより良いものにしたいと考えています。貴重なご意見を頂きましたことに感謝申し上げます。

4 おわりに

私は自分が良い教員であると思ったことは一度もありません。自分の授業に納得できることはなく、授業内容や授業方法を改善したいと常に願ってきました。そのための努力は続けてきたつもりですが、正しい解を見つけることができずに今に至っています。時代とともに、大学の授業内容や授業方法が変容していますので、それに対応できるような授業にしなければならないとも考えています。

公開授業を経験し、貴重なご意見を頂きましたことは、自分の授業を改めて考え直すとても良い機会となりました。今後の授業のために必ず役立てたいと願っております。



「英文会計」

矢部 孝太郎

(総合経営学部経営学科 教授)

1 はじめに

「英文会計」は総合経営学部における会計科目の3年次配当科目であり、会計カリキュラムにおける1年次配当科目「簿記論」「財務諸表の基礎」、2年次配当科目「会社会計論Ⅰ・Ⅱ」、3年次配当科目「財務会計論Ⅰ・Ⅱ」「国際会計論」などの発展として、または同時並行で学習する科目となっている。会計に関する知識や理論を基礎から中級・上級まで体系的に学習した後に、または同時並行で、英語による会計知識を学習する科目である。

「英文会計」とは、日本語の財務諸表を英語に翻訳する場合や、外国の会計基準で作成された英語の財務諸表を読む・理解する、経理・会計業務において外国企業、外国支店、外国子会社との関わりで英語表記の書類を読む・処理するといった場合のための、英語を使った会計知識のことである。これは、外国市場に進出して事業を展開している大企業を主とする多国籍企業やグローバル企業の経理実務においても、また、貿易を行う中小企業の経理実務においても、必要となる会計の素養である。連結決算を行うため、外国子会社の英語表記の財務諸表や会計資料を扱う必要があり、外国の証券市場への財務報告や規制当局への財務諸表の提出のために英語表記の財務諸表を作成する必要がある。さらに、IFRS（国際財務報告基準）に準拠した企業会計を行うためにも英語の会計用語の理解が必要となり、これらのために英文会計の知識が役立つ。それらの業務においては、外国企業などの担当者との英語による書面・メールおよび口頭でのコミュニケーションが必要となる。

大学での学びは次のことが目標となり、これらによって創造的能力の基盤を確立する。

- ・ 大学レベルの教養と専攻分野の専門知識を身につけること
- ・ 自分の考えを文章にまとめる能力、論文などの文章を書く能力を身につけること
- ・ 思考力・考察力・発想力すなわち知性を鍛えて高めること

「英文会計」の授業においても、ビジネス社会で活躍するために必要かつ役に立つ英文会計の専門知識の基本を講義するとともに、英語の財務諸表を読む、英語の会計テキストを読む、英語で会計に関するレポート類を書く、といった場合に備えた学問的基礎教養を学ぶという考え方で授業を設計・運営している。

2 「英文会計」の意義と必要性

「英文会計」の授業運営において最も重要な点は、まず、英語および英語の会計知識の必要性や重要性、役立ちを説明することである。したがって、授業運営における工夫として、学生・受講生には、「英文会計」の意義や必要性を説明すると同時に、現代社会における英語の学習や習得に関する意義や必要性を説明する。

現代の企業環境における日本企業は、企業成長の持続可能性の確保のために、外国市場への戦略的進出と外国における収益基盤の強化が不可避となっている。企業活動、ビジネス、社会のグローバル化の進展と高度化は、企業実務において多言語への対応を必然化し、会計実務においても、国際的コミュニケーション能力、特に英語能力の必要性が急速に高まっている。経理部の経理業務において、国際会計業務の担当者は、口頭のコミュニケーションでは **Speaking**（話す）と **Listening**（聴く）の能力が必要となり、文書・書類または書面に関しては **Writing**（書く）と **Reading**（読む）の能力が必要となるため、4つの英語能力のすべてが必要になる。

一方で、現在、AI技術を基礎にして、パソコン、スマートフォン、電子機器で、英語などの外国語の自動翻訳技術（文字・音声）、翻訳アプリ、翻訳機が急速に進化しており、文書の翻訳はそれで十分に対応でき、口頭のコミュニケーションでも簡単な内容ならばある程度対応できるようになってきたため、英語を学習する必要はないという考えも出てくる。そして、個人が英語を学習して身につける必要性があるのはなぜか、という疑問が出てくる。このような疑問について、明解に説明する必要がある。これについては、後述のとおり、①コミュニケーション、②リーダーシップ、③差別化（強さ、武器）の観点から、英語を身につけた方が有利だからと説明できる。英語の学習・習得にはコスト（労力、時間の消費、教材費用等）がかかるが、習得すれば長期的な人的資産（能力）から大きなリターンを得られるのである。

①コミュニケーション

『言葉はコミュニケーションの基本』だから、外国人とコミュニケーションを頻繁に行う状況では、英語という言葉をも身につける必要がある。自動翻訳ツールを使うより、コミュニケーションをとる本人が、英語という言葉を使えた方が『質の高いコミュニケーション』ができる。日常的、反復的に外国人とコミュニケーションを取る仕事であれば、自身が英語の能力を身につける必要がある。外国市場に進出している多国籍企業・グローバル企業の中には、社員は英語能力が必須、社内の会議と書類は英語、社内の使用共通言語は英語という企業も存在する。会社内で、人材育成として、従業員の英語能力を高めるための取り組み・プログラムを実施している企業も多い。

②リーダーシップ

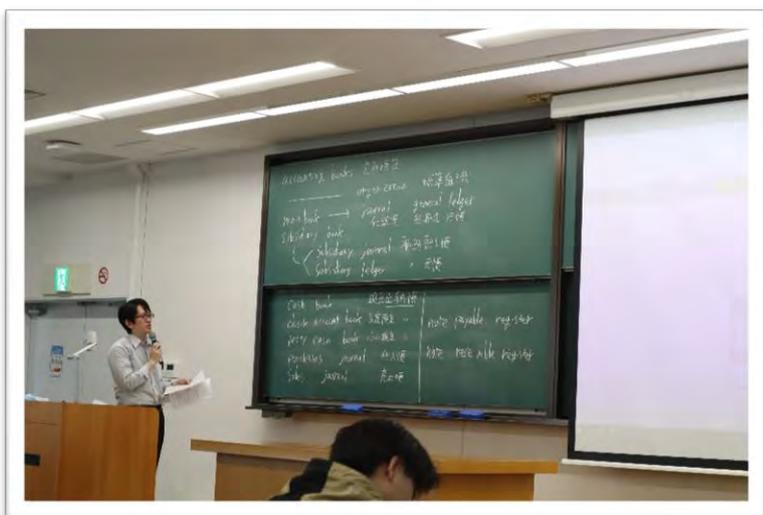
明治時代以来、社会で高い地位に就いて多くの部下を率いるリーダーになる場合、外国人とも対等にディスカッションし交渉ができる英語能力がある人は有能なリーダーと言われてきた。現代では、グローバル化と多様性（ダイバーシティ）の進展で外国人とのコミュニケーションの機会が増

え、企業の経営管理者もリーダーシップを発揮するために英語の能力が不可欠となってきた。高い地位に就いて人の上に立ち、人を統率し導いていくリーダー、部下を束ねるリーダー、そのような人材には、高度な専門能力、積極的な行動力、コミュニケーション能力とともに、高い英語能力が求められている。

③差別化（強さ、武器）

英語の能力・英会話の能力は社会で必要とされており、その能力を持っている人材は社会で高く評価されることが多くなっている。このため、英語を身につけることは、社会で活躍して成功するための競争上の強さや武器となる。自動翻訳の進化や普及で仮に英語を学ばない人が増えた場合は、逆に、英語を身につけた人材や英語力の希少価値が高まり、給料の差として反映されることで、英語を学習する価値は高まる可能性がある。

会計分野の職業専門家として公認会計士があるが、公認会計士試験では、令和9年度から問題（財務会計論・管理会計論・監査論の3科目）の一部が英語により出題されることになった。これは、



IFRS 適用企業の拡大、東証プライム上場企業に対する英文開示の義務付けなど、公認会計士の業務においても英語との関わりが急増しており、英語の能力が業務のために実際に必要となっている状況に対応するためである。

公認会計士試験は、公認会計士として仕事をするために必要な知識と能力の基本を身につけているかどうかを問う試験であり、簿記・会計・監査の知識とともに、英語および

英語による会計知識も業務において必要な知識と能力であるということである。それらを学び身につければ、実務において公認会計士として能力を発揮できるということでもある。

公認会計士になりたいと思う志望者、公認会計士として働きたいと思う受験者は、競争試験において合格するためには、財務会計論・管理会計論・監査論の教科書の内容のすべての専門用語につき、その英単語を覚える必要があることになった。本人が英語を習得する気が無い場合、試験制度の趣旨から言って、公認会計士の職業的な前提条件を満たさない、適格性を充足しないということになる。受験者にとっては大変な勉強負担の増加であるが、実務において現に必要となっている能力であるため、先行的な学習は、将来の業務における実務能力の向上に寄与すると言える。

3 授業運営における工夫

「英文会計」（半期：2単位）の授業では、簿記・会計・監査の専門用語の英単語を500語程度ではあるが、授業中に紹介・講義している。たとえば、資産は assets、固定資産は fixed assets、有形固定資産は tangible fixed assets あるいは property, plant and equipment (PP&E) または plant assets、減価償却は depreciation ということを説明する。

英単語のスペルを紹介し、英単語の発音を紹介する。重要性に応じて、その英単語の他の意味や関係する英単語を紹介する。このため、説明・紹介する英単語は、会計の英単語を中心にして、経営、ビジネス、経済に関係する英単語に広がっていく。そして、その会計上の意味、たとえば、なぜ固定は **fixed** か、なぜ有形は **tangible** か、なぜ **plant assets** とも言うか、といった内容を説明する。

「英文会計」の授業は会計の授業であるため、会計の理論や概念についても同時に説明する。たとえば、減価償却 **depreciation** の理論的な説明である。

英単語の発音の紹介では、英単語のカタカナ表記と発音の異なりを説明することもある。**business** のカタカナ表記はビジネスだが、発音は、/ˈbɪznɪs/, /ˈbɪznəs/ ビズネ(ス)、**management** のカタカナ表記はマネジメントだが、発音は、/ˈmænɪdʒmənt/ メニジメン(ト)であり、(長音で伸ばした)マネージメントではない、というように興味深い例を紹介する。

以前、受講学生が、この英単語を覚えて何の意味があるのか、と言っていることがあった(大学受験の時期になり電車内で高校生が英単語帳(赤シート)を手に英単語を学習しているのを見るたびに思い出すことがある)。携帯電話で調べれば学ばなくても記憶しなくてもすぐわかるではないか、と言う。この素朴な疑問について、受講生全員が納得のいく理にかなった確固たる答えを説明する必要がある。

私は次のように答える。あなたが今、漢字とそれによる語彙を読み書きできるのは、小学校から高校までの間に漢字の読み方を覚え、書き取りや音読・黙読の学習を積み重ねてきた経験があるからである。仮に流暢な英語のビジネスコミュニケーション能力を身につけるために英単語を 6000 語覚えるとして、会計用語を記憶するのにも、その一つひとつの積み重ねの過程が必要である。実際のコミュニケーションの場面で、いちいち英単語を調べないといけないのは円滑 (**smooth** スムー(ス)、スムーズ) なやりとりを妨げるし、その単語が多数になれば短い時間内に調べきれない。知識を使う実務の現場では効率性や生産性が重視され、基本的な内容をいちいち一つずつ調べる時間は無いことが普通である。そして、正確な知識を調べることは時間がかかる。独学ではさらに時間がかかる。このため、学校で事前に学んで身につけておくのであり、学校はそのためにある、と。

(なお、最近では、コンビニエンスストアで小学生向けの英単語(赤シート付、1000 語程度)の本が売られている。)

スマートフォンなどの自動翻訳アプリに頼りきった場合、機械の間違いまたは使い方の間違いで誤訳があっても気づかないし、人間が直接英語を使った方が機械を使うより信頼感がある。人間関係は信頼がすべてである。会計では、会計情報(財務諸表)が備えるべき質的な特性を有用な会計情報の質的特性 (**Qualitative Characteristics of Useful Financial Information**) と言い、最も根本的な質的特性は会計情報(財務諸表)が信頼できるという信頼性 (**reliability**) である。

4 意見交換会でのコメントと回答

公開授業意見交換会では、「ゆっくりとかみくだいて説明されている様子はとても良い印象を受けた」、「板書されている単語について、英語の単語を示すだけでなく、会計で使われている意味についても補足されているのが親切だと感じた」というお褒めの言葉のほか、次のような質問をいただいた。

<コメント1>

なぜパワーポイントではなく板書されているのか。理由を教えてください。

<回答>

「英文会計」では英単語などの英語を板書するが、黒板に教員が1文字1文字板書するのを見ることで、受講生が黒板に集中する効果があり、また、学生もそれを見て書き取る時間が確保される。英単語を学生自身が実際に書き取る作業も重要な学習である。パワーポイントは多くの情報を事前に吟味して整理してまとめたものを一度に提示することができるが、「英文会計」の授業内容は、英単語を一つひとつ丁寧に学習していくことを重視している。このため、パワーポイントではなく、黒板の板書を行っている。

<コメント2>

英語の発音をデジタル音声で流しているのはなるほどと思った。

<回答>

ネイティブによる正しい発音を聞いて、発音記号を見てその単語の発音を確認することで、英単語の日本人読みとの違いを確認し、それを紹介することも、受講生にとって新しい良い刺激となり、学習意欲に関してプラスになると考えている。

<コメント3>

教室の後ろのほうはざわついていて。前から座らせた方が私語も減るのではないか。

<回答>

教室では前方の座席が多く空いていて、多くの学生が自分の意思で後ろの座席に座るという傾向がある。また、授業では、黒板の面積の都合上、文字を極端に大きくすることはできないことから、前方の座席に座ることを繰り返し勧めているものの、後方の座席を選ぶ学生が多い実態がある。私語については適宜注意を行っているが、それと同時に、授業全体の品質をさらに向上させるという観点から前方の座席を選ぶインセンティブを考えるなど、今後いろいろな工夫や試行錯誤をしながら改善を繰り返していくということしかない。

5 おわりに

会計教育においては、「会計（アカウンティング）はビジネスの共通言語（ビジネス言語）」“Accounting is the language of business.”と説明されている。会計の専門用語とデータは、企業経営者、従業員、利害関係者の全員が意思決定やビジネスコミュニケーションのために共通して用いる共通言語だからである。自然言語の英語は実質的な世界の共通言語であり、特に国際ビジネス、観光、学術、技術に関しては、地球規模の（グローバルな）共通言語である。

「英文会計」では、このような会計と英語（日本語）という2(3)つの言語を説明している。言語記号体系の基本的なリテラシーの基礎素養の習得または涵養を主眼としている。そして、会計は、説明責任(アカウンタビリティ: **accountability**)の履行、情報公開(ディスクロージャー: **disclosure**)、説明責任の履行と情報公開に基づく透明性(トランスパレンシー: **transparency**)の確保を理念の根幹としている。「英文会計」の授業も、そのようなマインドを基底に置いている。

「英文会計」は、私個人として講義をしていて楽しい科目であり、また、受講生が楽しい、新しい発見があった、視野が広がった、英語に興味を持った、英語を勉強してみようと思った、英語の知識を増やせて得たものがあつた、と思ってくれることが少しでもあれば、それがこの科目の存在価値であると思っている。

「経営情報論Ⅱ」

安高 真一郎

(総合経営学部経営学科 准教授)

1 はじめに

私は、2025年4月より、大阪商業大学総合経営学部に着任いたしました。担当科目は、「経営情報論Ⅰ・Ⅱ」、「経営情報概論Ⅰ・Ⅱ」、「ゼミナールⅠA・B」です。また、2024年度は非常勤講師として出講していました。

2 経営情報論の授業内容

今日の社会において、情報は経営学が対象とする分野です。生産活動、販売活動などの現場からデータを収集・分析・管理・活用能力が必要不可欠となっています。ここでいう情報は、経営資源であるヒト・モノ・カネ・情報、それぞれを対象とする場合もあれば、上記の4つを統べる役割も持っています。この講義では、情報技術や通信技術の発展が経営活動にどのように貢献し浸透していったかを概観し、どのような経営情報システムを構築し展開することで経営意思決定において経営情報を管理・活用しているか、学生達は学んでいくことになります。

3 授業での取り組みと工夫

テキストは指定しておりません。毎回の授業ではパワーポイントを使用します。事前に資料を配信すると学生はノートを取らなくなることが多いため、必要に応じて授業後に manaba へアップしています。

今回の公開授業では、ノート代わりにするプリントが必要であったため manaba にて事前配布を行いました。極力、穴埋めではなく学生自身がペンを動かすようにノート形式にしています。これは、将来の就職活動時に自身で重要な部分を見つけ、完結に要約してメモを取るトレーニングも兼ねています。

専門的であっても難解な授業は、学生にとっても理解できず退屈なものになってしまいます。そのため、学生の興味関心を引くために、明解で分かり易い言葉を選んで授業をしています。しかしながら、ただ緩いだけの内容にはならないように、専門的な知識はきちんと身に付けられるようにメリハリの効いた授業展開に重きを置いています。

各授業では、極力、柔らかい雰囲気とフレンドリーさを重視しています。そうすることで、学生との距離も近くなり、学生が遠慮なく質問できる環境を作ることが可能となります。毎年、の受講者やその学年の



学生の質や特徴を把握し易くなり、以後の授業展開へ即座に反映させることができます。授業中に質問することが出来なかつたり時間が足りなくなった学生については、授業後に時間を取り、納得がいくまで対応しています。

大学教員となり、初心は自分が大学生だった頃にあると考えます。その当時に「何を知りたかつたか」、「どのような体験をした、またはしたかつたか」、「何に悩んでいたか」等、そのような体験・経験を忘れず今の学生に伝えていけたらと思っています。

<授業スライド：公開授業で用いたスライドから一部抜粋、公開授業の翌日に manaba へアップ>

<h3>経営分析（財務諸表分析）とは</h3> <ul style="list-style-type: none"> □ 企業が開示する財務諸表を分類、整理、比較、検討することで、企業活動の実態を明らかにし、その将来を予測し経営計画の立案に役立てる手法。 <p style="text-align: center;">↓ 簡単に言うと</p> <p style="text-align: center;">企業の財政状態や経営状況を明らかにする手法 例：安全性、収益性、生産性、成長性など</p> <p style="text-align: right;">Osaka University of Commerce 2</p>	<h3>経営分析（財務諸表分析）とは</h3> <ul style="list-style-type: none"> □ 安全性の分析 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 会社の支払い能力(借金を返済する能力)を見る。 □ 収益性の分析 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 投資したお金でいくら利益を生んだか分析する。 □ 成長性の分析 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 会社が成長しているかを、売上げや利益から判断する。 <p style="text-align: right;">Osaka University of Commerce 3</p>		
<h3>財務諸表とは</h3> <ul style="list-style-type: none"> □ 企業が利害関係者に対して、経営成績や財政状態などを明らかにする書類のこと。 □ 財務諸表には幾つかの種類があるが、特に重要視されるのが財務三表である。 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 貸借対照表…ある一時点での財政状態を表す ➢ 損益計算書…ある一定期間の経営成績を表す ➢ キャッシュ・フロー計算書…ある一定期間の現金(および現金同等物)の流れを表す <p style="text-align: right;">Osaka University of Commerce 4</p>	<h3>流動比率</h3> <p>流動資産：</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 1年以内に現金化が予定されている資産。 □ 現預金や売掛金等の売上債権、棚卸資産等からなる。 □ 流動資産は、まれに売掛金等の売上債権が貸倒れ、在庫となっている棚卸商品の陳腐化などにより現金化が出来ない場合もあるため注意が必要。 <p style="text-align: right;">Osaka University of Commerce 21</p>		
<h3>流動比率</h3> <p>流動負債：</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 1年以内に返済しなければならない負債。 □ また、長期の借入金や社債のうち1年以内に返還が見込まれる部分についても、流動負債として貸借対照表に記載される。  <p style="text-align: right;">Osaka University of Commerce 22</p>	<h3>流動比率</h3> <ul style="list-style-type: none"> □ 流動比率は、高ければ高いほど企業の支払能力が高いといえる。 □ 一般的には120%程度が理想と言われる。 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 高けりやいいものじゃない…。 $\text{流動比率}(\%) = \frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}} \times 100$ <p style="text-align: right;">Osaka University of Commerce 23</p>		
<h3>流動比率</h3> <ul style="list-style-type: none"> □ 流動資産が流動負債を上回っていれば短期的な支払余力があると推測できる。 <p style="text-align: center;">貸借対照表</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="background-color: #e0f0ff;">流動資産</td> <td style="background-color: #e0ffe0;">流動負債</td> </tr> </table> <p style="text-align: right;">→支払余力の目安</p> <p style="text-align: right;">Osaka University of Commerce 24</p>	流動資産	流動負債	
流動資産	流動負債		

＜ノート代わりのプリント：manaba で学生に事前配布＞

<p style="text-align: right;">2020年11月4日(水)</p> <p style="text-align: center;">経営情報論Ⅱ ～経営分析～</p> <p>学籍番号: 氏名:</p> <p>経営分析とは:</p> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div> <p>財務三表: 企業の財政状態や経営成績を示す財務諸表の中で、特に重要視される3つの表 ()…ある「時点」での財政状態を表す ()…ある一定期間の営利活動を表す ()…ある一定期間の現金（および現金同等物）の増減を表す</p> <p>経営分析で見えるポイント:</p> <p>安否性の分析…()</p> <p>収益性の分析…()</p> <p>成長性の分析…()</p> <p>貸借対照表の構造:</p> <div style="text-align: center;"> <table style="margin: auto;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">()</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">()</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">()</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">()</td> </tr> </table> </div>	()	()	()	()	<p style="text-align: right;">2020年11月4日(水)</p> <p>安全性分析に必要な3つの視点:</p> <p>固定比率…()</p> <p>固定比率…()</p> <p>流動比率…()</p> <p>流動比率とは:</p> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div> <p>ワンイヤールールに基づく、流動資産と流動負債は以下のように大別される:</p> <p>流動資産:</p> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div> <p>流動負債:</p> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div> <p>以下の算式より、流動比率を求めてみましょう:</p> <div style="text-align: center;"> <table border="1" style="font-size: small; border-collapse: collapse;"> <tr> <th colspan="4">貸借対照表(貸借対当表)</th> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">流動資産</td> <td style="text-align: center;">(500)</td> <td style="text-align: center;">流動負債</td> <td style="text-align: center;">(400)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">固定資産</td> <td style="text-align: center;">(100)</td> <td style="text-align: center;">固定負債</td> <td style="text-align: center;">(200)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">総資産</td> <td style="text-align: center;">(600)</td> <td style="text-align: center;">総負債</td> <td style="text-align: center;">(600)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">流動比率</td> <td style="text-align: center;">1.25</td> <td style="text-align: center;">固定比率</td> <td style="text-align: center;">1.50</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">固定比率</td> <td style="text-align: center;">1.50</td> <td style="text-align: center;">流動比率</td> <td style="text-align: center;">0.80</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">借入金</td> <td style="text-align: center;">(200)</td> <td style="text-align: center;">流動比率</td> <td style="text-align: center;">1.25</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">流動比率</td> <td style="text-align: center;">1.25</td> <td style="text-align: center;">流動比率</td> <td style="text-align: center;">1.25</td> </tr> </table> </div> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%; margin-top: 10px;"></div>	貸借対照表(貸借対当表)				流動資産	(500)	流動負債	(400)	固定資産	(100)	固定負債	(200)	総資産	(600)	総負債	(600)	流動比率	1.25	固定比率	1.50	固定比率	1.50	流動比率	0.80	借入金	(200)	流動比率	1.25	流動比率	1.25	流動比率	1.25
()	()																																				
()	()																																				
貸借対照表(貸借対当表)																																					
流動資産	(500)	流動負債	(400)																																		
固定資産	(100)	固定負債	(200)																																		
総資産	(600)	総負債	(600)																																		
流動比率	1.25	固定比率	1.50																																		
固定比率	1.50	流動比率	0.80																																		
借入金	(200)	流動比率	1.25																																		
流動比率	1.25	流動比率	1.25																																		

4 公開授業アンケートへの回答

公開授業の感想では、お褒めの言葉を多く頂きありがとうございました。一方で頂いたご意見やアドバイスにつきましては、迅速に取り入れさせて頂きます。また、同時にご質問も頂きましたので、ここにご回答差し上げます。

＜コメント1＞

PPT を用いて講義は行われていたが、PPT は manaba からダウンロードできるのだろうか。学生が映写されたスライドをスマホで撮っていたので気になった。

＜回答＞

スライドのファイルは、必要に応じて授業後に manaba にアップしています。ノート代わりのプリントで事足りる場合はアップしません。理由は、「どうせ後々アップされるのだから、メモする必要はない」と考える学生が多々見られるからです。就職活動で企業説明会に参加した時、「どうメモを取ったらいいのかわからない」という学生がいますが、彼らの将来のためにもあえて行っています。重要なポイントを見極め、要約してメモが取れるようになって欲しいと願っています。

＜コメント2＞

最後に出席を取られていたが、何か理由があるのか気になった。

＜回答＞

通常は授業の開始時に出席を取っております。この日は自分自身が緊張しており、出欠確認を最後まで失念していました。以後、このような事がないように努めさせて頂きます。

5 おわりに

私の教育に関する抱負は、「個々の学生のレベルに応じた指導を行い、基礎的な能力を身に付けた後、適切なサポートを行いながら、それぞれの目標に向かって学生自身の力で最後まで完成させ

る指導を行う」ことです。

授業やセミナーでは、まず学生とコミュニケーションを図り、個々の個性や能力を把握することが重要であると考えます。学問的な基礎をしっかりと学生に理解させた上で、学生自身で考え、応用できる能力を向上させる指導を目指しています。また、公表されているデータに基づいた実証分析や実際に企業や社会でのプロジェクトを企画し、学生が就職前に大学で学んだ理論を実践的に応用できる機会を設けることも考えています。

現在は、これまでに増して、様々なレベルの学生に対して授業を行わなければならない状況です。特に、授業中に与える課題を解答させたり議論させたりするためには、よりきめの細かい指導が必要となります。

担当している授業では、机上での計算だけでは学生の理解も遅いため、時間の許す限り一人一人の理解度を確認し、さらに個別に対応しました。計算や数学に対する苦手意識を持つ学生が多く、克服させるために興味が出るような教材作りを心掛けました。具体的には、実際の製品の原価の計算プロセスを身近な品物(例えばペットボトル飲料)等を例に挙げて解説し、ビジュアルな教材やゲームを通じて、実際に原価管理を体験し製造コストを計算させる工夫もしました。

また、学生自身が将来就職したい業種や企業を選び、企業に対する興味を喚起させることが重要であると考えます。そのために、企業のホームページの企業情報を検索させ、学生には身近ではない B to B の企業(CM で親しみのある日清紡)等を紹介して興味を喚起させるように努めました。

「有名」な企業は「優良」な企業であるのか、ということなどを考察させることにより「経営分析」の授業を通じて、キャリアマインド育成にも繋がるように教育していくことが重要と考えます。

どの科目であっても、「これを学ぶ事により、将来の自分にとってどのように役に立つのか」を理解させることが重要であると考えます。

最後に、「面倒見が良いと甘やかすは決して同意語ではない」というのが、私の教育理念です。建学の精神と併せ、大学生時代、そして社会に出ても生き活きと活躍出来る学生の育成に尽力していきたいと思います。

今後も、学生の個性を活かし、学生生活を有意義に過ごせるような教育環境を提供し、自ら進んで様々な活動に参加できる積極的でリーダーシップを発揮できる人材を育成するような指導を行いたいと考えています。



「交通経済論」

湯川 創太郎

(経済学部経済学科 准教授)

1 はじめに

私は現在、今回担当した、公開授業の「交通経済論」の他、「交通経済学」「マクロ経済学入門」「ミクロ経済学入門」「サービス経済学」「ゼミナール(1~4年)」を担当している。

今回の公開授業では、5限というやや遅めの時間にも関わらず、多くの先生方や担当職員の方に参観して頂いた。また、対面の意見交換会に出席する事は出来なかったが、アンケートを通じて貴重なコメントを多く頂ける事が出来た。この場を借りて改めて感謝申し上げる。

2 講義について

2.1 講義の概要

私が担当している「交通経済論」は、私の専門である交通経済学や交通政策に関する講義で、前期に実施している「交通経済学」の発展科目である。2022年までは前期に「交通経済学Ⅰ」を、後期に「交通経済学Ⅱ」を開講し、いずれも交通現象を経済学の視点で見ていく事を目的としていた科目であった。その後、2023年に、「交通経済学は、ミクロ経済学・マクロ経済学に関する部分と、現代経済に関する内容があり、それを分けて系統立て出来ないか」という議論をふまえ、ミクロ経済学・マクロ経済学と関係の強い「交通経済学」と、現代経済に関係の強い「交通経済論」に科目名を分ける事になった。なお、「交通経済学Ⅰ・Ⅱ」として教えていた時期には、Ⅰに一部政策的な内容が、Ⅱに一部理論的な内容が含まれていたが、改名時に内容を入れ替えている。

「交通経済論」は、国内外の交通政策や交通に関する様々なトピックを学ぶ科目と位置付けており、「日本の地域の交通政策」「先進国の交通政策」「開発途上国の交通政策」「自動車交通」「物流」に関して学んでいく。前期の「交通経済学」との大きな違いは、私自身の研究に基づく、オリジナルの内容が多い事である。前期の「交通経済学」では、「交通における価格と需要の特徴（交通の場合は価格に比べて移動時間が交通の需要に大きく影響する）」など、一般的な交通経済学の内容と同じ内容を取り扱うが、後期の「交通経済論」が取り扱う「開発途上国の交通政策」は、研究者が少ない事もあり、他大学で学ぶことが出来ない話題を多く取り扱う。「自動車交通」については、既存の交通経済学では自動車が現在ほど普及していなかった高度経済成長期に議論の枠組みが構築されたためか、自動車を否定しがちな既存の交通経済学のテキスト、講義であるのに対し、自動車が生活必需品となった現代において肯定的な視点に立って自動車交通を考察するとどうなるか、という異なる視点で講義を行っている。

このように、取り扱う内容は多岐にわたるが、科目全体にわたって「合理的行動」という経済学の考え方を切り口に解説していくという点も特徴である。例えば、開発途上国の交通政策においては、評価システムが不合理なために、合理的行動の結果として「真面目に働いても損をするだけだから働かない」という理由で人々が効率的に働かない事が交通問題の原因の一つになっていることを説明したり、「一人当たり実質GDPが数千ドル程度の国の交通状況はどのようになっているのか、個別具体的な事例を挙げずに考えて下さい」と理論的な考察を重視した課題を過去に出題した事もある（「○◇大統領は△地下鉄の建設を指導し・・・」といった個別具体的な事例をネット記事からコピー&ペーストし提出する学生もいるが、その場合は採点から除外している）。

2.2 講義における工夫

実際の講義実施にあたっては、スライドを用いず、レジユメの内容のうち特に重要な項目やレジユメの内容に関連する補足情報を板書し、必要な事項をノートに書き取り学び取ってもらう形態を重視している（なお、11月の公開授業においては、授業前の準備時間などの都合もあり、その旨を説明した上で、レジユメの内容をそのまま張り付けた簡易なスライドを使用している）。一度に表示される文字数が少ないスライドではなく、文字数が多いレジユメや板書から必要な情報を読み取り要約してもらうという事を重視しているためであるが、実際には説明やレジユメ・板書に目を向けていない学生も多く、そのような学生にどのように勉強してもらうかは今後の課題である。

また、講義の様子は撮影してYouTubeにアップロードし、URLをmanabaに貼り付け、欠席者が視聴できるようにしている（視聴できるのはURLを知る人のみ）。この取り組みは2020年より実



施している（全面オンラインの時期には、音声のみアップロードし、通信回線が貧弱な学生に配慮した）。コロナ禍後の実施にあたっては、欠席者が多くなることが心配されたが、実際には対面での出席も多いことから、特段の変更なくこの方法を継続している。ただし、教室で出席登録をするだけで単位を取得できると勘違いしている学生が多い事が、動画視聴で済ませる学生が少ない事に影響しているようにも感じる。

2.3 講義を実施するにあたり気になっていること

5限の講義であり、教室で話す位であれば帰宅しようと思判断する学生が多いためか、受講生の私語が問題になる事は少ない。しかしながら、授業に関係のないコンテンツをスマートフォンで眺めることに熱中し、授業に集中できていない学生が一定数存在する。難解な理論の説明であればやむを得ない面もあるが、授業内容に関連する動画など、前提とする知識がなくとも理解できるように工夫したコンテンツを紹介しても同じような反応であるのは残念に感じる。

授業を集中して聞き、これまで分からなかった事が分かるようになるといった「学びの楽しさ」を体験した経験がないように見える学生が多いことは気になる点である。「迷惑をかけない」「前方着席の場合は講義に集中する事」をルールとしているので、他人に迷惑のかかるような事をしていない場合には注意していないが、学生が何か授業に集中できるような仕掛けが作れないかと常に考えている。

3 意見交換会におけるコメントや質問とそれに対する回答

公開授業に参加された先生方より様々な意見と感想を頂いた。以下、良い点、改善すべき点、その他のコメントに分けて回答していきたい。なお、「良い点」に分類される意見も、私が認識している課題点と今後の改善策を付している。

3.1 良い点

まず、「冒頭の授業のおさがりが良かった」という意見を頂いた。私の講義では、毎回これまでの講義で何を話したのかを説明したうえで、その回の本題に入る事にしている。特に、難解な理論などを説明する場合には、1回目からの講義内容をふまえて、どうしてその理論をこの授業回で説明するのか、背景を分かりやすくしている。なお、復習の説明が長くなりすぎると、かえって学生にとって分かりにくくなる可能性もあり、話し過ぎには気を付けている。

「レジュメに行番号が付してあり、説明の際に行番号に言及するので分かりやすい」というコメントも頂いた。これは、本学に赴任した2018年以来継続的に行っていることである。特に重要な項目については、各学生がレジュメの該当行に視線を合わせるまで説明を待つこともある。レジュメについては、バインダーに綴じることを念頭に、A4両面、各回の1~3枚を基本とし、通しのペ

ージ番号をつけることで、これまで配布した資料が揃っているか揃っていないかが一目で分かるよう工夫している。他学で非常勤講師を勤めた際に、学生から行番号が良いとの評価を頂いた事もあり、この取り組みは継続していきたい。この取り組みについて特段の問題はないが、場合によっては行番号が目立ちすぎたり、逆に薄すぎたりして見えない、といった事象が発生するので、行番号の書体や色については気を使っている。

「教員自身が撮影した現地の動画を活用した説明が良かった」との感想も頂いた。今回の動画は現地の道路交通の状況を紹介したものであるが、分析ツールの使い方を説明した動画や、図表を使った経済理論の分析の講義とは別に録画したものを参考資料とすることもある。撮り直しをしながら作成するため、講義で直接話す場合よりわかりやすいが、制作に時間がかかることが難点で、材料はたくさんあるものの新しい動画を出せない点や古いものを更新できない点が課題となっている。以前は毎年更新できないかと考えていたが、ここ数年は数年～十数年の使用に堪えるようなものを少しずつ蓄積する事が重要であると考えているようになっている。

3.2 改善すべき点

課題点として、「時折スクリーンの前に立って、スクリーンの方を向いて説明している時があり、学生からスクリーンが見えなくなっている」との指摘を頂いた。前述のように、私はスライドの代わりに板書を多用する授業を行っているが、そのために「スライドやスクリーンを有効に活用する」事に慣れておらず、工夫を怠っている可能性がある。授業を受講生の視点から見るとどうなるか、については動画などで確認することが出来るので、今後改善に努めたい。

また、「動画の音声にマイクの音声がかぶり、教員の声が聞こえない」との指摘も頂いた。実は、公開授業後の別の授業で、学生と共に教室中央部で動画を見る機会があり、その際に同様の事を感じ、すぐに音量を調整した。教壇で聞こえる音と、教室中央部で聞こえる音には差異がある事を念頭に置いて講義する必要性を痛感している。

3.3 その他のコメント

授業の動画撮影について、「動画視聴をする学生と、対面授業出席の学生で差別化を図っているのか」という質問があった。過去には対面授業欠席者に関しては課題の量を増やす等の対応をした事もあるが、成績処理が煩雑になる事から、同等の課題を出すようにしている。また、授業出席の代わりに動画でしっかり受講する受講生は少数で、しっかり動画を閲覧せずに課題に取り組む学生も多い事から、今後何らかの対応が必要であると認識している。また、動画を何度も見て試験に臨む学生（授業出席者でも復習のために見る学生がいる）と、授業にも出席しない、動画も見ない学生の差が極端で、この点についても対応方法を検討しなければと考えている。

4 おわりに

今回は7年ぶりの公開授業であった。往時と比べると、必要な項目を説明しながら同時に学生の反応を見て話すスピードや内容を微調整する、といった工夫を余裕をもって出来るようになった。他方で、学生から見た場合の立ち位置や音響機器の使い方など、改善を要す部分も残っている。また、前述のように、学生の受講モチベーションを何とかして高められないかという思いもある。今回頂いたコメントや意見をふまえ、より良い講義実施に向けて尽力していきたい。



「スポーツ事業論」

古屋 孝生

(公共学部公共学科 専任講師)

1 はじめに

本公開授業の科目名は「スポーツ事業論」であり、サブタイトルを「スポーツ事業の多様性とそのマネジメント」としてしています。本科目では、プロスポーツチームやリーグの運営、フィットネス産業、スタジアム・アリーナ管理、公共スポーツ施設運営（PFIを含む）、スポーツ用品産業など、スポーツ事業を構成する多様な領域を体系的に扱っています。加えて、スポンサーシップ、チケット販売、会員制度、広告・広報や SNS プロモーションといった収益モデルやマーケティング手法、さらには国際大会・地域大会を通じた地域活性化やスポーツツーリズムとの関係性についても講義しています。本公開授業の実践を通じて、これらの幅広い内容を学生にどのように整理し、理解につなげているのか、その授業設計と運営の工夫について紹介します。

2 授業の設計思想と運営計画

本授業の設計思想は、スポーツ事業を個別事例の集合としてではなく、「構造を持った継続的な事業」として理解させることにあります。全15回の授業では、産業別・機能別にスポーツ事業を段階的に学び、最終的にそれらを統合的に捉えることを到達目標としています。その中で、公開授業を行った第9回「スポーツ事業のチケット販売と会員制度のマネジメント」は、事業を持続可能なビジネスとして成立させるための中核的な回として位置づけています。

今回は、学期前半で扱った各産業・施設・組織のマネジメント（第2～6回）や、スポンサーシップ・SNS プロモーションによる価値創出（第7・8回）を踏まえ、それらを実際の収益と顧客の継続的關係へと結びつける役割を担っています。学生にとっては、「集客」や「動員」といった抽象的理解から一歩進み、顧客をデータと関係性の両面で捉える転換点となる回です。

本授業の受講生像は、スポーツへの関心は高いものの、事業としての視点や収益構造の理解を深めることが求められる初学者層です。そのため、教育上の課題として、用語理解の差や受動的な学習姿勢が生じやすい点を想定しています。そこで今回は、チケット販売や会員制度を単なる販売手法として扱うのではなく、顧客関係マネジメント（CRM）の視点から位置づけ、マーケティング施策がどのように成果へ結びつくのかを構造的に整理します。

また、今回は後半に扱うスポーツツーリズム、大会運営、組織運営・人材育成といったテーマへの橋渡しの役割も果たします。安定した観客基盤や会員基盤がなければ、地域連携や国際大会、組織運営の議論は成立しないことを示すことで、学生が科目全体を一貫した流れとして理解できるよう設計しています。

3 講義の具体的流れと実践上の工夫

第9回「スポーツ事業のチケット販売と会員制度のマネジメント」は、「講義→アクティブラーニング→振り返り」の三段階構成で実施しました。前半の講義パート（約35分）では、スポーツ観戦市場の規模や成長要因、スポーツサービスの特性を踏まえ、チケット販売と会員制度がスポーツ事

業の収益基盤として果たす役割を整理しました。特に、スポーツが無形財を中心とするサービス産業である点を強調し、観戦体験の価値が価格設定、顧客満足、再購買行動へとどのように連動するのかを、統計データや具体事例を用いて解説しました。

中盤のアクティブラーニング（約35分）では、プロスポーツチームの実例をもとに、平日ナイターや対戦相手、立地条件といった試合条件を

設定し、「どのようなチケット施策・会員施策が有効か」を学生自身が検討する課題に取り組んでもらいました。価格施策と非価格施策の違い、既存顧客と新規顧客へのアプローチの差異を意識させることで、講義内容を実際のマネジメント判断へと接続することを意図しています。正解を求めるのではなく、条件に応じた最適解を考えさせることで、スポーツ事業の実務に近い意思決定思考を促しています。

最後の振り返り（約20分）では、チケット販売や会員制度が単なる販売手法ではなく、前半講義で学んだスポーツサービスの無形財における「価値づくり」と消費者（ファン）との「関係づくり」を同時に担う仕組みであることを再確認しました。また、学んだ内容を講義で配布したノート（レポート）に整理することで、理解の定着を図っています。

この構成を採用した背景には、初学者が「チケット＝価格」「会員制度＝特典」といった表層的理解にとどまりやすいという課題意識があります。期待される成果としては、学生が「集客＝無料や値下げ」といった単純な発想から離れ、付加価値や関係性構築の視点で議論できるようになる点が挙げられます。一方で、価格戦略やダイナミックプライシングの概念は専門性と抽象度が高く、初学者には難易度が高い側面もあります。そのため、今後は事例数の調整や図解の工夫を通じて、理解をさらに支援していきたいと考えています。

4 意見交換会での議論と改善に向けた視点

公開授業後の意見交換会では、授業内容だけでなく、資料構成や運営方法、学生の学習態度に至るまで、多角的な視点からアドバイスをいただきました。

まず、講義資料については、図表やイラストを多用した構成が視覚的に分かりやすく、学生にとって理解しやすい点が高く評価されました。一方で、英語表記やドル建ての数値が含まれている点については、初学者には難易度が高い可能性があるとの指摘がありました。これに対しては、専門性を保ちつつ、表記の変更および日本語による補足説明や背景解説を加えることで、学生の理解を支援していきたいと考えています。

また、オリックスバファローズ・ネーミングライツ事例における「大商大シート」といった具体的な事例が、学生の関心を引きやすく、主体的な学びにつながる点が評価されました。授業中の問いかけについても、学生自身が課題を調べる姿勢は有効である一方、その結果を共有する仕組みを取り入れることで、双方向性がさらに高まるのではないかと意見が出されました。今後は、短時



間でも学生の考えを可視化し、相互に学び合う場面の導入を検討していきたいと考えています。

さらに、話すスピードや要点整理の工夫、教室後方の学生の集中度への対応、出席や課題提出を評価にどう反映するかといった運営面の課題も提示されました。これらを踏まえ、今後は、説明に用いる語数を削減し、声のトーンや話すスピードを意識した授業進行を行うとともに、要点を整理した視覚資料の設計へと改善を進めていく予定です。また、eラーニングを活用し、教材配信、受講状況、小課題の提出を一元的に管理することで、学生自身が授業への参加意識を高め、到達度を振り返る機会を設けていきたいと考えています。あわせて、教員側にとっても学生の理解度を把握しやすく、適切な助言や学びの補完、成績評価を行いやすい環境づくりを検討しています。これらの取り組みを通じて、専門性の高い講義内容に加え、学生の主体的な参加を促す授業運営の仕組みづくりの実現を目指していきたいと思ひます。

5 まとめ・今後に向けて

本公開授業を通じて、講義内容の専門性と構造的な整理に加え、学生の思考を引き出す授業設計の重要性をあらためて確認しました。特に、講義・アクティブラーニング・振り返りを組み合わせた構成は、学生の主体性を促す点で、初年次や専門科目であっても応用可能であると考えます。今後は、学生の学修成果をより可視化する工夫や、双方向的な学びを支える評価方法の改善にも取り組んでいきたいと考えています。本実践が、教員同士が分野を越えた授業改善のヒントとして共有され、教育の質を継続的に高めるために、相互に学び合うきっかけとなれば幸いです。



「経営学概論Ⅱ」

辺見 佳奈子

(総合経営学部経営学科 准教授)

1 はじめに

本授業「経営学概論Ⅱ」では、経営学の基本的な概念を理解し、それらを多様な事例と結びつけながら考える力を養うことを目的としています。学生には、講義や小テスト、課題への取り組みを通じて、主体的に学ぶ姿勢を身につけてもらいたいと考えています。また、授業内容だけでなく、学びに向かう姿勢や集中力の保ち方についても意識してもらえよう工夫しています。本資料では、授業の概要と意見交換会でいただいたコメントへの回答をまとめています。

2 授業の概要

本授業は、基本的に講義形式で進めています。授業(木曜 2 限)で使用する資料は毎週月曜日に manaba へアップロードされますが、重要なキーワードがあえて穴抜きになっているため、実際に授業に参加しなければ十分に理解できない構成になっています。また、資料の穴抜きを埋めるだけでなく、必要に応じて自分でメモを取るようにも指示しています。

さらに、学習内容の定着を確認する目的で、小テスト(各 10 点)を学期中に全 3 回実施します。これらの小テストは、授業へ継続して出席するための動機づけにもなっていると考えています。

加えて、毎回、授業時間の半分を経過したあたりで、簡単な課題に取り組んでもらいます。課題は manaba へ入力する形式が多いですが、手書きの場合もあります。

3 意見交換会でのコメントに対する回答

意見交換会では色々とコメントをいただきありがとうございました。コメントおよびアンケートでは評価していただいた点もあり、大変励みになりました。以下では、コメントを一部抜粋してご回答いたします。

<コメント1>

スクリーン、板書、書画カメラと、多様な道具？を活用されていたが、操作にかかる時間を考えたとき使う道具は絞ったほうが良いのか、自分の授業を振り返りながら少し考えてしまった。

<コメント2>

g()、h()などの部分は、スクリーンに「キーボードで文字（正解）を入力し、転換させて」見せていたが、これは「表示」を工夫してパワーポイントのアニメーション機能などを使用するのが、「楽（教師側からみても）」だと思った。

<コメント3>

換気のため窓を開けていたが、11月後半ということもあり、日が差す中でも肌寒さを感じたが学生の居眠り防止といった目的もあるのか気になった。

<回答>

上記に関しては、学生の集中力をコントロールするために臨機応変に対応しています。90分の授業を集中して聞くことは、学生に限らず社会人であっても難しいところです。もちろん、授業内容を面白いものにして、それによって集中力を維持してもらうことが望ましいと思います。

しかしながら、授業はつねにテレビゲームやスマートフォン(SNS)のように面白いわけではありません。したがって、授業内容に興味を持ってもらえるようにするための工夫と同時に、(学生にとって)面白くない内容であっても集中して聞いてもらうための工夫をしたいと考えています。

これについて、「集中して聞きなさい」と口頭で注意することはそこまで有効ではない可能性があります。そのような指示は、もともと一生懸命聞いていたまじめな学生を委縮させ、集中していなかった学生(=つまらない授業を何とかがんばって聞いていた学生)に心理的な反発心をいだかせる可能性があるからです。

このため、授業中に学生の集中力が低下してきたと感じれば道具を変えたり、窓を開けたり、急に少し授業内容からズレた雑談を挿入したりして、あえて教室に変化を作り出すようにしています。授業の中頃で課題を行うのもそのためです。課題自体にリフレッシュ効果があるので、この時間を取ることで学生の集中力が回復します。

もちろん、これらがすべてうまくいくとは限りません。特に教員の方も他業務を抱えて疲れているときは、その雰囲気を感じ取っているらしく、なかなか教室全体の集中力が戻ってこないときがあります。最終的には「あと〇〇分だから頑張ろう」と声をかけたりしますが、このように言葉で指示してしま



うのは最終手段にしています。

上記のような工夫を試みている理由は、授業の成果は学生の集中力・意欲に左右されるからです。ヒトの学習過程は、当然外部から五感を使って情報を知覚することから開始されますが、外部の情報のすべてが知覚されるわけではありません。騒がしいパーティでも自分の名前だけは聞こえるというカクテル・パーティ効果は有名な例で、このとき自分の名前以外の音声情報は存在していても聞こえないのです。

すなわち、教員がいくら良い授業をしても、学生の集中力や意欲が欠落するならば、教員の音声や黒板の文字は知覚すらされないということです。これらの議論にご興味のある先生は、拙稿「辺見佳奈子（2025）「テレワーク（非対面）と出社（対面）の両方を活用した効果的な人材育成に関する研究」『大阪商業大学論集』」をご覧ください。

このような理由から、授業自体の質を向上させる努力と同じくらい、学生の集中力や意欲を維持・向上させる努力が必要であると考え、上記のような工夫をしている次第です。

<コメント4>

経営層を「図化して板書していた」のは分かりやすかった。ただし、白いチョークの「線が細く」てしかも「白色も薄く」書かれていたので後ろの方からは「見にくく」なっていたのが、少し残念だった。チョークで黒板に書く際には、「力を入れて」「押さえながら」書くことによって「太い線、濃い色」になるので、もう少し力を入れてチョークを抑えながら書く方が良いと思った。

<回答>

このような自分ではなかなか気がつけないところにご意見いただき感謝しております。早速翌週から力を入れて文字を書くようにしました。

4 おわりに

大学の授業に唯一の正解というものはないと思います。各教員が努力し、授業の多様性があることが学生にとっても良いのではないのでしょうか。

多様で質の高い教育を可能にするには、教員が教育に打ち込める環境を構築し、教育成果が評価されなくてはなりません。しかしながら、これはFDやその他施策の増加を意味するものではありません。なぜならば、それらの施策の増加により（特に委員の）先生方のお時間が奪われることで、かえって教育の質の低下を導く可能性があるからです。

結局のところ、かけられる時間と労力が少なければ質の高い教育はできません。大学教員の意欲を信じ、あらゆる効率化による業務負担の軽減を地道に継続することこそ、真に質の高い教育を提供する近道かと思います。

「マーケティング戦略論Ⅱ」

下坂 光

（総合経営学部商学科 助教）

1 はじめに

本科目の目的は、前期の「マーケティング戦略論Ⅰ」で学習したマーケティングの基本を土台に、

マーケティングの諸概念全般についての知識をさらに深めていくことです。多くの学生が前期から継続して受講しており、私自身も前期からの繋がりを意識しながら本科目の解説を行うようにしています。受講している学生は商学科の学生だけでなく、他の学部・学科の学生もバランスよく受講しています。よって、マーケティング関連科目が何を目指しているのか、という点についてあいまいに理解している学生もいることから、授業をすべて受ければ「将来は企業の中で活躍できるマーケッターになれる」と学生に話し、この科目が目指していることがマーケッターの育成であることを明示しています。もちろん、マーケティングの理屈も伝えていますので、学問としての面白さを感じてもらうことも大事と思っています。これに加えて、仕事に活かせる力を身につけることが学生のメリットになると考え、毎回の授業を進めています。

2 授業の進め方

本科目は履修登録が400名で、そのうち約7割の学生が実際に受講しています。学生数が多いことから、配布資料は通常はA3用紙1枚、特別な課題（ケース分析）を行う場合のみA3用紙2枚を配布しています。授業はスライド投影を基本にしており、毎回60～70枚の投影スライドのうち16枚の重要スライドのみを配布資料として抜き出し、それを穴埋め形式にしてA3用紙1枚にまとめ配布しています。授業前にこの配布資料を教室前に設置し、学生は資料を取ったのちに着席しています。

授業冒頭で配布資料の有無を確認し、前回の授業の振り返り（約15分）、今日の授業内容の説明（60～70分）、manabaによる小テスト（残りの時間）という流れで授業を進めています。



授業の最後の小テストは、配布資料に掲載した穴埋めから出題するようにしています。これにより、授業を聞くモチベーションが少しでも高まることを狙うとともに、単語レベルとなりますが、授業で学んだことを振り返る効果を持たせています。モチベーション向上と振り返り効果のためなので、小テストは何度も受験可能なドリル形式で出題し、100点を取るまで何度でも受験するように学生に促しています。

3 授業の工夫

教育サービスの成果を高めるには、教員側のサービス提供の質を上げることと学生の授業への参加度を高めることが必要と考えています。サービス提供については、なるべく学生が身近に感じられる具体的な内容を授業の中で話すように心がけ、その質の向上を図っています。授業で扱う概念は非常に抽象的であり、初めてマーケティングを学ぶ学生にとっては理解のハードルが高いものも多いです。一方で、マーケティングの成果は常に学生の身近にある製品やサービス、あるいはそれらの広告に現れています。マーケティングのこの特徴を活かし、概念と具体的な事例の両方をセットで学生に提示し、わかりやすさの向上に努めています。動画で見た方がわかりやすい事例（例：

テレビ CM) は特に積極的に取り入れ、授業の中で実際に動画を見てもらい紹介しています。

学生の参加度を高める仕掛けとしては、上述の穴埋め形式の配布資料で行っています。穴埋め形式の配布資料を配ることで「穴埋めすること」だけが目的化してしまい、本来必要なノートテイキングやそのスキル向上を阻害するという可能性もあります。しかしながら、現状では配布資料なしで学生の参加度を高める良い方法が見当たらないため、この方法が最善と考えています。さらに良い方法がないか、今後検討していきたいと考えています。

4 現在の問題点（苦心している点）

現在認識している問題のうち、一番大きなものに出席登録後の学生の退室（所謂「ピ逃げ」）があります。特に本科目の教室（521 教室）は後方に出入口があり、教員に気づかれないように出ていく学生、教員に注意されても出ていく学生が毎回数人います。出席確認を授業の最後の方に行うなど、なんとかこれをなくすことはできないか常に考え取り組んでいます。現状ではまだ実現できていません。

多人数の科目であることから学生の私語には注意を払っています。しかし見学いただいた先生からは「私語が気になりました」というコメントをいただきました。正直なところ、521 教室では学生の私語が教壇にいる私まで聞こえない、ということもあり、静かな環境を作れていたと思いましたが、私の考えが甘かったと反省しております。今後、より気をつけたいと思います。

5 意見交換会及び公開授業アンケートのコメントに対する回答

すべてではありませんが、いただいたコメントについて回答いたします。

<コメント 1>

具体的事例が多いのは良いのですが、多すぎて、どの事例が何の説明に使われたのか記憶に残りにくいと思いました。一覧表のような形で、概念と事例を結び付けた表などを使用してはどうか。

<回答>

事例を多くすることでデメリットが生じる、ということに思い至っていませんでした。学生の理解が促進されるように、一覧化による整理など検討したいと思います。

<コメント 2>

学生の課題の回答を紹介されていました。興味深い回答内容でしたが、それを書き写す学生は見える範囲ではいませんでした。聞いているだけではもったいないです。知識の活用という視点から課題を出されているのであれば、自身の回答と見比べて感想を書くなどしても良いのではないのでしょうか。

<コメント 3>

資料を持っていない学生が多いことが気になりました。

<回答>

授業最初の振り返りの中で、前回授業の課題で模範的な答えを書いてくれた学生の回答内容を紹介しています。前回の課題の資料を持ってくるように指示していないことから、聞いているだけという状態の学生が多くなってしまったのだと思います。資料は毎回配布していますので、その整理

の仕方や授業への持参について今後学生に伝えていきたいと思います。

<コメント4>

一部の学生は小テストに気を取られ、授業に集中できてないように見受けられました。

<回答>

配布資料の穴埋めが小テスト対策になることから、これが目的化してしまう学生が生じているものと思います。誤った目的化がなされないよう、また授業に集中してもらうようにアナウンスをしていきたいと思います。

6 おわりに

この度は貴重な機会と多数のコメントをいただき、心からお礼申し上げます。他の先生の授業を見る機会にもなり本当に勉強になりました。今後の授業をより良いものにできるよう努力を重ねていきたいと思います。本当にありがとうございました。



2 授業アンケート

本学では、履修者の授業に対する認識や取り組み状況を把握し、担当教員が授業運営の点検・評価や改善の指標として活用することを目的に、学生を対象とした授業アンケートを年度ごとに実施している。以下は今年度の授業アンケートの実施概要である。

2.1 実施方法

今年度の授業アンケートは、前期及び後期授業期間の第14週 [2025年7月14日(月)～19日(土)、2026年1月5日(月)～10日(土)] に、出席確認システム Saai-MAS を利用して各対象科目の教室内で行われた。前期、後期ともに、第14週授業での実施が難しい場合は、予備日として設けられた翌週の第15週授業で行った。

2.2 対象科目

各教員の授業アンケートの対象科目は、原則として、演習科目及び体育系の実習科目を除く担当科目のうち履修者数が最も多い科目となっている。履修者数や担当科目の変動によって、必ずしも毎回同じ科目が対象になるわけではない。このため、「同一科目の経年比較をしたい」、「別の科目に関する学生の意識や反応を知りたい」など、教員の要望や判断により対象科目を変更することも可能である。

2.3 質問項目

2023年度から全面的に対面授業が開始されたことで、授業アンケートの質問項目もオンライン授業対応のものから対面授業対応のものに戻った。今年度の授業アンケートでは、昨年度と同様、18の質問項目が用いられた(次頁<授業アンケートの内容>参照)。

＜授業アンケートの内容＞

授業アンケート質問項目

このアンケートは、授業について皆さんの意見を聞き、教員が授業をより充実させるために実施するものです。回答内容があなたの成績に影響することは一切ありませんので、率直な回答をお願いいたします。該当の項目にチェック☑して回答してください。

- Q1 あなたの学年を選んでください。
 1年生 2年生 3年生 4年生 その他
- Q2 あなたの学科を選んでください。
 経済学科 経営学科 商学科 公共学科 公共経営学科 その他
- Q3 あなたはこの授業にどの程度出席していますか。
 全て 8割以上 6割以上 4割以上 4割未満

Q4～Q 18の回答は、以下の基準にしたがって、あてはまる番号を1つ選んでチェック☑してください。				
1	2	3	4	5
全く	あまり	どちらとも	ある程度	強く
そう思わない	そう思わない	いえない	そう思う	そう思う

[1] 授業内容について	1:全くそう思わない 2:あまりそう思わない 3:どちらともいえない 4:ある程度そう思う 5:強くそう思う				
Q4 関心が持てる授業内容である。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q5 教員の授業内容の説明はわかりやすい。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q6 テキスト・板書・資料等が内容の理解に役立っている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q7 成績の評価方法が分かりやすく示されている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q8 この授業を受けて、自分が何を学ぶべきか明確になった。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q9 この授業を受けて、いろいろな視点から物事を見ることができるようになった。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
[2] 教員について	1:全くそう思わない 2:あまりそう思わない 3:どちらともいえない 4:ある程度そう思う 5:強くそう思う				
Q10 言葉が聞き取りやすい。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q11 熱意をもって授業をしている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q12 計画的に授業をしている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q13 静かな環境で学生が受講できるように配慮している。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
[3] あなた自身について	1:全くそう思わない 2:あまりそう思わない 3:どちらともいえない 4:ある程度そう思う 5:強くそう思う				
Q14 私語や居眠りなどをせずに授業に集中している。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q15 遅刻や途中退出をしていない。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q16 授業の内容が理解できている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q17 授業時間外でも、この授業のための学習をした(予習・復習、課題の準備などを含む)。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
[4] 総合	1:全くそう思わない 2:あまりそう思わない 3:どちらともいえない 4:ある程度そう思う 5:強くそう思う				
Q18 総合的にみて、この授業に満足している。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
[5] 自由記入欄	※担当教員の指示に従って記入してください。				

ご協力ありがとうございました。

2.4 教員からのフィードバック

授業アンケート結果に対するフィードバックとして、各教員は出席確認システム Saai-MAS から集計結果を確認したうえで、「感じた点や学生にフィードバックすべき点」と「学生の理解度を高めるために授業運営で工夫している点」について、「授業アンケートの振り返りシート」に自由記述形式で記入し提出することになっている。今年度の前期は2025年8月29日(金)に、後期は2026年2月27日(金)に提出期限が設けられた。

2.5 集計結果の開示方法

授業アンケートの集計結果は本学図書館で閲覧することができる。また、各教員による「振り返りシート」の記述内容の一部は、本学ホームページのFD活動について紹介した頁*から見るができる。「<参考資料> 学生の学びを支援するための取組み紹介.pdf」**において、<取組み例>として掲載されている。

* https://ouc.daishodai.ac.jp/profile/educational_research/fd/

** https://ouc.daishodai.ac.jp/uploads/284d21b6ea0106f74f0d39bfb2e0bf59_1.pdf



3 FD ワークショップ

教職員の授業改善の機会の充実を図ることを目的として、今年度よりFDワークショップが年に一度開催されることになった。これは教職員を対象にした任意参加型の研修会であり、その時々に適したテーマが選ばれ、それについて参加者が悩みや意見を交換し、得た知見を今後の授業運営に活かしていくことを目標としている。

今年度は7月2日(水)14:40より4号館2階424教室において、障がい学生支援委員会の協力のもと、「合理的配慮と授業運営」というテーマで開催された。参加方法として対面とZoomによるオンラインのハイブリッド形式が取られた。対面での参加者は30名、オンラインでの参加者は8名であった。以下は、FD委員会委員長の宍戸邦章教授による報告である。



第1回FD Workshop 2025の開催

宍戸 邦章

(公共学部公共学科 教授・FD委員会委員長)

1 FD委員会の活動

FD委員会では、これまで①授業アンケート、②公開授業、③FDニューズレター、そして④FD研修を主な活動の柱として取り組んできました。FD活動と密接な関わりのあるSD(Staff Development)推進委員会でも研修は義務化されており、SD研修と内容や特徴が重複しないFD研修のあり方を昨年度は模索しておりました。2025年度より、教職員の自主性や主体性を重視した任意参加型の研修会として、FD研修会の名称を「FDワークショップ」と改め、開催することに致しました。

今後、FD委員会では、すべての年度で前期末と後期末に授業アンケート、年度末にFDニューズレターの刊行を行い、奇数年度では前期にFDワークショップ、後期に公開授業、偶数年度では前期に公開授業、後期にFDワークショップを行う計画です。

2 FDワークショップ

第1回となる今年度のFDワークショップは、「授業運営における合理的配慮についての座談会」と題して、次頁のチラシの通り2025年7月2日(水)の4時間目に424教室で行いました。障がい学生に関わるテーマであることから、専任教員だけでなく、非常勤の教員にもアナウンスをし、職員の参加も呼びかけ、障がい学生支援委員会の協力も得ました。教室での対面でのワークショップ

プと同時に、Zoom を利用して教室外からも参加できるハイブリッドの体制を取りました。

FD ワークショップ当日は、前半に FD 委員会委員長がワークショップの主旨を説明し、その後、教職員がランダムに 8~10 名程度のグループに分かれ、今年度や過去に障がい学生についてどのような配慮の願い出が出ており、それに対してどのような対応をとっているのか、他の教員と相談したい内容はどのようなものか、50 分程度意見交換やディスカッションをする時間を設けました。任意参加形式のため、対面参加は教職員が 30 名、オンラインでは 8 名の教員の参加となりました。

合理的配慮に関する具体的な対応状況は、各教員からマナバコースに入力していただき、FD ワークショップ後に、当日参加できなかった教員も含め、全教員に対してマナバコース経由で情報を共有しております。

合理的配慮のあり方は、教員と学生の「建設的な対話」のなかで決まっていきますが、教員の教育方針、講義の性質や教室環境、障がい学生のもつ障がいの特徴など、様々な要素のなかで検討されるものであり、唯一の答えがあるわけではありません。障がいをもつ学生にも他の学生と平等に教育を受ける権利を確保するため、今後も大学の重要な課題としてこのような機会を設ける必要性があると感じました。

実は、学内の教員は、委員会業務や共同研究などで一緒にならない限りほとんど話す機会はなく、他の教員がどのような講義をしていて、何に課題や悩みを感じているのか、ほとんど知る機会もありません。今年度初めて FD ワークショップを開催しましたが、普段あまり話したことの無い教職員とグループワークのかたちでざっくばらんに情報共有できる機会は貴重であり、新しい発見がある場となりました。FD ワークショップがこのような教職員間の新しい関係性を築く場にもなれば

<FD ワークショップのチラシ>



FD Workshop 2025

FD ワークショップは、教職員の自主性や主体性を重視した任意参加型の研修会です。2025 年度は「授業運営における合理的配慮についての座談会」を予定しています。今後その年度に適したテーマでワークショップを開催する予定です。

R6 年 4 月から合理的配慮が義務化されましたが、対応に迷うケースはないでしょうか？教員・職員、常勤・非常勤、若手・ベテラン、ゼミナール・大教室を問わず、ざっくばらんに情報交換ができればと思います。

対面と Zoom のハイブリッドで開催予定です。

日付 7 月 2 日 (水)
時間 14 : 40 (60~80 分程度)
場所 4 号館 2 階 424 教室

※当日、マナバコースを利用します。ノートパソコンをお持ちの先生は持参ください。

※Zoom 参加の方は上記日時に下記から
ミーティング ID: 814 8835 1378
パスコード: 199907

主催: FD 委員会
協力: 障がい学生支援委員会

<FD ワークショップ 2025 の様子>



よいと感じています。

自主性や主体性を重視した任意参加型の研修会は、そのテーマの設定に工夫が必要だと思います。また、教職員が教育の現場で実際に抱えている課題やニーズを把握し、ニーズにあったテーマを設定することが大事だと思います。今後も FD 委員会のなかで議論を重ね、本学の教育の質を高めることに繋がるワークショップにしていく所存です。

本学ではカリキュラム改正により、次年度から 1 年次後期にプレゼミナールを新たに設置しますが、その内容や

運営方法についても教員間で話し合う場が必要になると思われます。また、近年の生成 AI と大学教育について、上手に AI を活用できるメリットもあれば、学生がレポートを AI に書かせてしまうなどの不正の問題も生じています。生成 AI の急速な発展と大学教育についても話し合える機会が必要だと考えています。

4 大学院 FD 活動

本学における大学院FD活動の一環として、修士論文中間報告会が2025年10月11日（土）に開催された。以下は、大学院地域政策学研究科の宍戸邦章教授による報告である。

「2025年度修士論文中間報告会」開催される

宍戸 邦章

（大学院地域政策学研究科 教授）

大学院地域政策学研究科の「2025年度 修士論文中間報告会」が10月11日（土）10：00～15：40（6号館623教室）に開催されました。大学院地域政策学研究科は、経営革新専攻と地域経済政策専攻からなりますが、地域経済政策専攻から4名、経営革新専攻からは6名が報告しました。発表時間は1人15分間で、報告後は約10分間の質疑応答が入ります。報告した大学院生の氏名、指導教員、論文題目は次頁の表のとおりです。

この報告会は、当該年度に修士論文の提出を希望する院生が、論文の構成や内容等を報告し、さまざまな専門領域にわたる大学院担当教員から質問や助言を受けることを通して、各自の論文をより一層充実させることを期待して行われています。大学院に在籍して2年目の院生が主に報告していますが、1年目の院生も聴講しており、次年度の論文提出に向けた取り組みを点検する機会ともなっています。この報告会は、院生の相互研鑽と研究能力の育成に資するものであると同時に、指導教員が出席した他の教員による院生への質問や助言を通して、論文指導能力をより向上させていくための大学院FD活動の一環でもあります。

教員からは主に次のような観点から質問や助言がなされます。

- ① 地域政策学研究科の修士論文に相応しい主題設定になっているか
- ② 研究の目的・成果が明確であるか
- ③ 先行研究を踏まえたオリジナル性の高い研究となっているか
- ④ 研究・分析方法の選択が妥当であるか
- ⑤ 論文構成や文章表現が適切であるか

報告後には、活発な質疑応答がなされ、多くの報告で時間を超過しました。質疑応答の内容は、論文のテーマとなる概念の定義に関すること、先行研究に関すること、研究の着眼点の課題や研究枠組みの設定に関すること、調査方法や計量分析など研究の方法に関すること、など多岐に渡ります。

<2025年度修士論文中間報告会論文題目一覧>

<地域経済政策専攻> (司会：宍戸 邦章)

氏名	指導教員	論文題目
陸 何帆	狭間 惠三子	「長三角地域一体化発展」における嘉興市の役割と成長可能性に関する研究
張 曦文	宍戸 邦章	日中における高齢者「互助」福祉の比較研究 —中国「社区養老」モデルとしての時間銀行に着目して—
QU GUIXIAN	石川 雄一	商業地区における外国人ビジネスの展開について —大阪市西成区鶴見橋商店街周辺地域を事例として—
大森 貴央	西嶋 淳	過疎地域の持続的発展に資する地域産業のあり方に関する研究

<経営革新専攻> (司会：西井 進剛)

氏名	指導教員	論文題目
LIU RUI HAN	梅野 巨利	中国における中国企業と外資系企業のCSR推進プログラムに関する比較研究
劉 陽	孫 飛舟	電気自動車企業「BYD」に関する一考察 —スマイルカーブ理論を中心に—
李 俊寧	池田 潔	日中消費者のCSRにおける情報の差異に関する実証研究
宋 浚羽	孫 飛舟	電気自動車 (EV) の普及におけるアフターマーケットの役割と課題 —中古車市場と自動車整備業界を中心に—
王 棟	太田 一樹	日本における外国人経営者の創業環境と課題 —中国人経営者を中心に—
江川 真人	加藤 司	格闘ゲームの顧客創造におけるコミュニティの役割

<報告後の質疑応答の様子>



大学院生のプレゼンテーションでは、PowerPoint 内に読み上げる文章をすべて書き込んでしまっている報告が散見されました。フロアに提示する情報をより限定し、口頭で説明する情報とは分ける必要があるかもしれません。また、毎年度生じている課題ですが、留学生が多いこともあり、教員からの口頭での質問に対する回答が的確になされていないケースが散見されました。母国語ではない言語でプレゼンテーションや質疑応答をすることは難しいことですが、普段の大学院の講義内で大学院生と教員がディスカッションする時間をより多く持ちたいと思います。

大学院生の皆さんは、1月上旬に修士論文を完成させ、その後副指導教員も含めた口頭試問に臨みます。この報告会がよりよい修士論文の執筆に繋がる機会になることを願います。



大阪商業大学 FD ニュースレター 第 27 号

発行日 2026 年 3 月 20 日

発行 大阪商業大学 FD 委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町 4-1-10

TEL 06-6781-8816 FAX 06-6781-6156